

台灣中高級日語學習者縮約形使用的意識調查

羅濟立

東吳大學日本語文學系副教授

摘要

一般認為，日語「縮約形」是 JFL (Japanese as a Foreign Language) 在口語運用上感到較困難的項目之一。本研究透過問卷分析，探討台灣中高級日語學習者在學習縮約形時，抱持著怎樣的使用意識？「想使用」群和「不想使用」群又與縮約形的使用意識有著怎樣的關係？

研究成果顯示，學習者對縮約形具有一定程度的知識，但存在著「我覺得使用縮約形會對人不禮貌」、「我覺得常常會擔心自己的縮約形用錯」等等阻礙縮約形使用的原因。「不想使用」群的學習者特別是在「面對縮約形的態度」方面呈現較被動的使用意識。此外，大部分的學習者認為縮約形的使用為學習帶來益處，且希望縮約形的學習越早越好，期待教科書或教師能多教點縮約形。

關鍵詞：台灣中高級日語學習者、縮約形、原形、使用意識

受理日期：2015.03.13

通過日期：2015.10.30

Japanese Learners in Taiwan and Contracted Forms

Luo, Ji-Li

Associate professor, Department of Japanese Language and Culture,
Soochow University

Abstract

It is believed that the contracted forms are difficult items on the oral use for Japanese learners. This study investigated the Japanese learners' awareness of contracted forms in Taiwan. And reduce the differences between the "want to use" group and "do not want to use" group.

The result shows, learners have a certain degree of knowledge about contracted forms; 「Give a rude impression」 「Often afraid of making mistakes」 were the main reason that inhibits the use. The "do not want to use" group showed passive attitude of using contracted forms. Moreover, learners thought that they will be able to reap the benefits through contracted forms. They hope to learn early, and teach more in textbooks and teachers.

Key words: Japanese learners in Taiwan, contracted forms, the original forms, awareness survey

台湾人中上級日本語学習者の 縮約形使用に関する意識調査

羅濟立

東呉大学日本語学科准教授

要旨

日本語の「縮約形」は教室習得中心の JFL はなかなか運用に至らない項目であると考えられている。本研究では台湾の中上級日本語学習者の縮約形を指導するには、縮約形の学習において、どのような使用意識を持っているのかという問題について、「使いたい」群及び「使いたくない」群と、縮約形の使用意識との関係について検討した。

その結果、縮約形についてある程度知識を持っており、「縮約形を使うと失礼な印象を与える」、「使っている縮約形を間違える不安がよくある」など、縮約形使用を阻害する要因が存在することがわかった。「使いたくない」群が特に「縮約形への対処」において使用に関して積極的であるとも言い難い結果が得られた。また、多くの学習者が縮約形の使用を通して得られるものがあると考えていた。そして学習者が早い時期に、教科書や教師に縮約形を教えてほしいという強い要望があることが明らかとなった。

キーワード：台湾人中上級日本語学習者、縮約形、原形、使用意識

台湾人中上級日本語学習者の 縮約形使用に関する意識調査

羅濟立

東呉大学日本語学科准教授

1. 先行研究及び本研究の目的

「けれども→けど」「てしまう→ちゃう」「なければ→なきゃ」「では→じゃ」などのような縮約形及びそれに類するくだけた現象は、日本語教育において、「正式な場面にも縮約形の存在することが認められる」ため、「日本語学習者が学習目標としなければならぬ。」（土岐 1975）と言われている。また、「日本人の話しことばに接した学習者がぶつかる問題の一つに縮約という現象がある」（堀口 1988：99）とも言われている。大坪（1982）は、『日本語教育事典』の「促音化」「長母音の短母音化」「縮約形」の項で、教師がそれらの現象について意識的に調整し、現実的・反省的知識をもつことの必要性・重要性を示唆している。

これまでの主要な縮約形研究においては、母語話者及び学習者の使用実態に注目されてきた。母語話者と学習者の比較研究を行い、縮約表現は、インフォーマルな場合だけでなく、丁寧体の会話の中でもごく自然に現れるものもあり、自然な会話運びの上で重要なものの一つで、丁寧体を用いる相手との会話においても、効果的に取り入れることが不可欠であると考えられている（堀口 1988、上原・福島 2004、浅田 2004、福島・上原 2004、東 2006、2008、ボイクマン 2010）。また、嶺岸（1999）は録音した刺激会話を作成し、絵本の解釈についてのインタビュー、教科書（ダイアログと会話練習の部分）を取り上げ、縮約形のある刺激会話（18 の原形／縮約形のペア）を日本人母語話者に聞かせて、「自然さ」と「かまわなさ」について評価を求め、縮約形を（初級から導入するか、どんな場面で用いるかなど）三つのグループに分けた。さらに自然なデータを用いて修正を行い、縮約形の段階的、継続的な指導の必要性を指摘した。

しかし、これらはいずれも縮約形の使用実態に着目して調査が行われた研究であり、学習者主体の使用意識を調査したものではない。外国語としての学習（以下、JFL（Japanese as a Foreign Language）とする）環境において、東（2008、2009）は、中国の場合、一部の項目（「んだ」）に関して使用率がかなり低いか、或いはほとんど使用していない（「きゃ」「ちゃう」「とく」）と指摘した。また、中国の大学日本語教育では縮約形は教材に文法項目として導入されているが、教室活動において使用されることは少なく、運用に関する明示的な指導はほとんど行われていない。学習者はより自然な日本語を話せるようになりたいと強く望んでおり、縮約形の使用効果に大いに期待していることを指摘している。

また、同じく JFL 環境である台湾における縮約形の研究には竹田（2011）と羅（2014）がある。竹田（2011）は台湾で使用されている教科書では 7 項目の縮約形がどのように扱われているかを分析し、また日本語教師へのアンケートを行い、教師の縮約形に対する認識、指導への考えを調査した。教科書分析においては、「のだ→んだ」を除く 6 項目で現在の段階でまだ指導が足りない、または導入の時期や指導法を考え直す必要があるという結果となった。また日本語教師へのアンケートでは、縮約形を積極的に指導する場合に教師の配慮が必要だが、それに加え教科書にも吟味した上で縮約形の明示的な指導を施すべきだと主張している。羅（2014）では、日本人母語話者のデータを参照しつつ、丁寧体基調の会話における台湾人日本語学習者の縮約形の使用状況を考察してみた。その結果、母語話者による縮約形が基本（90%以上）であるものと、母語話者による縮約形の使用率が非常に低い（0%～5%程度）ものとは、学習者は母語話者とほぼ同様の使用状況となっているが、母語話者による縮約形が原形を上回る／同程度（50%～80%程度）であるものと、母語話者による縮約形の使用率が原形を上回らない（15%～40%程度）ものとは、母語話者の使用状況とずれる項目が多いということが明らかになった。後者の縮約形を効果的に使用できるよう指導する

ことが大切であることを示唆している。

上記の JFL の場合の縮約形についての先行研究から、中国と台湾と学習環境は異なっているにもかかわらず、学習過程において、学習者が様々な困難やストレスに遭遇していることがわかる。しかも、「母語話者が多く使用する縮約形を、教室習得中心の JFL はなかなか運用には至らない」ということが明らかになっても、学習者の意識を知ろうとしなければ、比較研究の結果が何を意味するのかは解明されない。このような理由から、学習者の使用意識に着目して論を進めてきたのは小針（2013）が挙げられる。

小針（2013）では JSL（以下、JSL（Japanese as a Second Language）とする）環境の日本語学習者の縮約形使用意識を明らかにすることにより、縮約形の「不使用」と原形との「使い分け」の背景にあるものを捉え、日本語教育においては、1) 縮約形の使用意識を他者と共有する機会を持つこと 2) 縮約形の発音を練習する機会や使用する機会を増やすこと 3) 教師はステレオタイプを植え付けるような説明をしないこと 4) 話しことばと書きことばには違いがあることを意識することを示唆した。しかし、同じ日本語学習者でも、日本語を第二言語とする者（JFL）と外国語とする者（JSL）とでは使用意識は異なっていると考えられる。また、小針のデータは、6名という限られた人数であり、個人差を排除できないという問題がある。使用意識の重要性を指摘しているものの、台湾人学習者がどのように対処しているのかは解明されておらず、台湾の教育者としてどのような支援ができるのかについては言及されていない。

以上のことをふまえ、台湾の日本語学習者の縮約形を指導するには、縮約形の学習において、どのような使用意識を持っているかについて考察を行なう。また、先行研究からは「学習者は母語話者のように縮約形を使うことができない。どうすれば使えるようになるのか」という意識も窺えるが、そもそも学習者は縮約形を使えるようになりたいと思っているであろうか。「使えない」のではなく、「使いたくない」と思っている可能性もあるため、その「使いたい」

及び「使いたくない」と、縮約形の使用意識との関係を検討する必要がある。つまり、学習者の「使いたい／使いたくないのはなぜか」という点から使用意識を見極め、要因を明らかにする必要がある。

そこで、本研究の目的は、日本語を専攻する大学生を対象に、台湾の大学における中上級¹日本語学習者は 1) どのような使用意識を抱えているのか 2) 使いたい／使いたくないのはなぜか 3) 「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差が見られるのかを明らかにすることとする。

なお、本研究においては、「縮約形」をボイクマン（2010）の定義に従い、斉藤（1991）の縮約形と上原・福島（2005）の拡張形に当てはまるもの、さらに「なんと」が「なんて」となるように音節が変化するもの、つまり、「同一と認められる語（句）が異なった複数の音形を持って現れるもの」を今回の縮約形の定義とした。そのもとの形を「原形」と呼ぶ。

2. 研究方法

2015年7月、台湾のS大学に在籍する、日本語能力試験N1、N2に合格している日本語学科の学生を対象に、Googleのオンラインアンケートにより調査を行った。得られた回答（データ）に不備のなかった95名の内訳を表1に示す。

表1 調査対象者の内訳

性別	男性 22 名、女性 73 名
所持日本語能力	N1（1 級）38 名、N2（2 級）57 名
会話能力 （自己評価）	とても流暢 6 名、やや流暢 33 名、普通 50 名、 あまり上手じゃない 6 名、ほとんどできない 0 名
留学や滞日の期間	無し 66 名、1～3 ヶ月 13 名、4～6 ヶ月 9 名、 7～12 ヶ月 1 名、1 年～2 年 4 名、2 年以上 2 名

1. 日本語学科在学中の学習者であり、日本語能力試験 N1、N2 に合格している者を中上級学習者とする。

本調査で得られた情報を研究目的以外に用いることはなく、結果はすべて統計的に処理されるために個人が特定されることはなく、調査に参加しなくとも不利益を被ることはないことを伝えた。なお、回答の所要時間は5分から10分程度であった。調査は無記名で実施した。

本研究で調査に用いる質問を作成するに当たり、台湾の大学で学ぶ日本語学習者5名に行った半構造化インタビューから得た回答を加え、質問項目を作成した。縮約形に関しては、前述の協力者に、「使うか使わないか、またはその要因は何か」と尋ね自由に話してもらった。得られた回答はKJ法（川喜田1967）を用いて分類し、カテゴリーを抽出した。次にそれらを包括する上位カテゴリーに整理した。その際、日本語教師（日本語母語話者）2名にそのカテゴリーを検討してもらい、同じカテゴリーになると思われる項目が筆者と一致するかを討議しながらまとめていき、これに基づいて項目を作成した。その後、5名の日本語学習者を対象に予備調査を行い、質問全体の分量や言葉の表現などの項目内容を修正し、日本語版による質問項目を確定した。なお、本調査では中国語版の調査用紙を用いた。中国語版への翻訳にあたっては、筆者がまずすべての項目を訳し、その後、バイリンガルの日本語教師2名によりバックトランスレーションを行い、項目の表現を再検討した。調査の内容は、縮約形の知識に関する6項目、縮約形への対処に関する8項目、縮約形における問題に関する12項目、縮約形の接触環境に関する3項目、縮約形を通して得られるものに関する6項目、の全35項目である。回答形式は、「そう思う」「やや思う」「どちらでもない」「あまり思わない」「そう思わない」の5段階評定である。アンケートの内容は巻末の付録を参照。

得られるデータについてExcelを用いて分析を行った。各変数（項目）の基礎統計を算出した。「使いたい」群と「使いたくない」群の差について検討するため、各項目の t 検定を行った。

3. 結果と考察

縮約形を使いたいか使いたくないかについて、「どちらかと言えば使いたい」学習者は 78 名（82.1%、男性 17 名、女性 61 名）、「どちらかと言えば使いたくない」学習者は 17 名（17.9%、男性 5 名、女性 12 名）であった。縮約形を使いたいと考えられる学習者は多いことが示唆された。以下に、縮約形を使いたい学習者 78 名を「使いたい」群、縮約形を使いたくない学習者 17 名を「使いたくない」群とし、縮約形の使用意識について「使いたい」群と「使いたくない」群に差があるかも検討したい。なお、「そう思う」を 5、「やや思う」を 4、「どちらでもない」を 3、「あまり思わない」を 2、「そう思わない」を 1 として得点化することによって、作成した質問紙の 35 項目について項目分析を行った。

調査の結果から、まず、統計の結果について考察を行い、次に、本研究の知見から教師の介入可能な教育支援について論じてみる。

3.1 縮約形の知識

縮約形の知識に関する各項目の得点を表 2 に示した。得点が高いほど、縮約形に関する知識を持つことを意味した。全 6 項目の得点はすべて中央値の 3.0（得点は 1.00–5.00 の間）以上であり、中上級の学習者は縮約形に関して一定の知識を持っていることがわかった。また、平均値が 4.5 以上の項目として高い順に、「縮約形は日本語の話し言葉に使われるものであり、書き言葉に使われるものではない」（4.73）、「日本人が速く話した時に縮約形が多く使われる」（4.58）である。

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、すべての項目に有意な差が見られなかった。

表 2 縮約形の知識

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P 値
話し言葉と書き言葉を区別することができる	4.09	0.78	4.12	0.72	3.94	0.99	0.48
縮約形は日本語の話し言葉に使われるものであり、書き言葉に使われるものではない	4.72	0.58	4.75	0.58	4.58	0.59	0.31
縮約形はインフォーマルな場合だけでなく、一部のものは丁寧体基調の会話文にも使われている	3.45	1.15	3.47	1.16	3.35	1.13	0.70
縮約形は文法的な違いによってその使用頻度も異なる。例えば、原形「では」に対する縮約形「じゃ」は、名詞に後続する複合助詞の場合（例：日本じゃよくあることだ。）、接続助詞の場合（例：じゃ、また。）、否定が後続する場合（例：学生じゃない。）のように、文法的な違いによって使用頻度も異なっている	3.57	1.11	3.62	1.08	3.35	1.18	0.40
縮約形は文法的な違いによってその丁寧さ・改まり度も異なる。例えば、原形「では」に対する縮約形「じゃ」は、名詞に後続する複合助詞の場合（例：日本じゃよくあることだ。）、接続助詞の場合（例：	4.12	0.95	4.19	0.89	3.82	1.14	0.24

じゃ、また。)、否定が後続する 場合（例：学生じゃない。） のように、文法的な違いによ って丁寧さも異なっている							
日本人が速く話した時に縮約 形が多く使われる	4.57	0.59	4.61	0.56	4.41	0.69	0.28

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

表 2 のように「縮約形の知識」においては、多くの学習者は縮約形の定義・知識についてある程度分かっている。「日本人が速く話したときに縮約形が多く使われる」、「縮約形は日本語の話し言葉に使われるものであり、書き言葉に使われるものではない」の平均値はそれぞれ 4.58 と 4.73 と高いことから、学習者が日本語の話し言葉の特徴を意識していると考えられる。これがきっかけとなり、それがいずれ日本語の会話能力の向上にも繋がっていくものと考えられる。それにもかかわらず、「縮約形はインフォーマルな場合だけではなく、一部のものは丁寧体基調の会話文にも使われている」、「縮約形は文法的な違いによってその使用頻度も異なる」の平均値はそれぞれ 3.45 と 3.58 となり、他の項目より比較的低いことから、それに関する認識不足があり、縮約形の定義について台湾の日本語教育現場では十分に定着したとは言えないであろうと考えられる。そういった知識を知らない学習者は、実際の会話では縮約形を理解できないことや縮約形を使用できない場合があり、縮約形の運用力を阻害することが示唆された。そのため、縮約形などの音変化に定義や知識を持ってもらえるように、それに関する情報や知識を提供していくことが重要と考えられる。正しい知識を提供することが縮約形使用を促進させると考えられる。ちなみに、「縮約形の知識」において、「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差が見られなかった。

3.2 縮約形への対処

縮約形への対処に関する各項目の得点を表3に示した。a-fは得点が高いほど、縮約形への対処の仕方が受身的であることを意味した。その中で、a「縮約形を使うと失礼な印象を与える」とe「縮約形は慣れればよく、学習する必要はない」の二項目の得点は中央値の3.0を上回っており、学習者の縮約形使用を阻害する要因になりうることがわかった。一方、g「教科書や教師にもっと縮約形を教えてほしい」とh「縮約形の学習は早ければ早いほどよい」の二項目で前向きに思っている学習者が多く、学習者が早期に、そして教科書や教師にもっと教えてほしいという強い要望を持っていることが窺われた。

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のないt検定を行った。その結果、「縮約形を使うと失礼な印象を与える」、「縮約形を使うとくだけた印象を与える」、「縮約形は若者言葉で、丁寧さが欠けている」、「縮約形を使う必要がない」、「フォーマルな文法形式（原形）を勉強すればいい。縮約形を勉強する必要はない」の5項目に有意な差、「縮約形は慣れればよく、学習する必要はない」の1項目に傾向差が見られた。「使いたくない」群は「使いたい」群に比べて、縮約形に対して受動的な認識を示したことが示唆された。

表3 縮約形への対処

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P値
a. 縮約形を使うと失礼な印象を与える	3.16	0.92	3.03	0.89	3.76	0.80	0.00 (**)
b. 縮約形を使うとくだけた印象を与える	2.72	0.83	2.61	0.80	3.23	0.81	0.01 (**)
c. 縮約形は若者言葉で、丁寧	2.73	0.97	2.64	0.97	3.17	0.85	0.04 (**)

さが欠けている							
d. 縮約形を使う必要がない	1.73	0.86	1.57	0.70	2.47	1.09	0.01 (**)
e. 縮約形は慣れればよく、学習する必要はない	3.21	1.11	3.12	1.15	3.58	0.77	0.05 (*)
f. フォーマルな文法形式（原形）を勉強すればいい。縮約形を勉強する必要はない	1.76	0.78	1.66	0.71	2.23	0.94	0.03 (**)
g. 教科書や教師にもっと縮約形を教えてほしい	3.74	0.88	3.76	0.89	3.64	0.83	0.60
h. 縮約形の学習は早ければ早いほどよい	3.25	1.09	3.17	1.12	3.58	0.84	0.10

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

表 3 から分かるように、「縮約形への対処」に関しては、多くの学習者は「縮約形を使うと失礼な印象を与える」と思っている。しかし、縮約形は丁寧な会話場面でも使用されている（土岐 1975、上原・福島 2005、ボイクマン 2010）ことから、学習者の認知が日本語母語話者とずれがあることがわかる。一方、注目すべきは、「縮約形を使うと失礼な印象を与える」の他に、「縮約形を使うとくだけた印象を与える」、「縮約形は若者言葉で、丁寧さが欠けている」、「縮約形を使う必要がない」、「フォーマルな文法形式（原形）を勉強すればいい。縮約形を勉強する必要はない」の 5 項目に有意な差、「縮約形は慣れればよく、学習する必要はない」の 1 項目に傾向差が見られ、「使いたい」群に比べて、「使いたくない」群の学習者は縮約形に対してマイナスなイメージを大いに示したということである。先行の研究結果（堀口 1988、嶺岸 1999、東 2006、ボイクマン 2010）から、縮約形は若者に限らず、一般の母語話者の日常会話で頻繁に使用されており、縮約形はどれも一様に丁寧さに欠ける印象を与えるわけ

ではないことがすでに検証されている。縮約形を使用すると「失礼だ」、「くれた」、「若者っぽい」という縮約形の使用定義・範囲や認識に関する学習者の認知は母語話者とは異なっている。そのことから、特に「使いたくない」群の学習者は「使う必要がない」、「学習する必要がない」、「勉強する必要がない」と思ったのであろうと考えられる。また、「慣れればよく、学習する必要はない」、「縮約形の学習は早ければ早いほどよい」、「教科書や教師にもっと縮約形を教えてほしい」の平均値は中央値を上回っている。この点について、教師の指導や学習内容を特に不満を持っていないが、縮約形を思うように使いこなせないことを痛感している学習者は指導を受けることが重要だと考えている。学習者の使用を促進させるためには、早い時期の体系的な縮約形教育を行うことによって、縮約形の重要性和実用性が認知され、さらにそれが次の実践行動につながり、使用が促進されるのではないかと考えられる。

3.3 縮約形における問題

縮約形における問題に関する各項目の得点を表4に示した。得点が高いほど、各要因に問題があると学習者が感じていることを意味した。「縮約形より、原形のほうに慣れている」と「使っている縮約形を間違える不安がよくある」の得点は中央値3.0以上であり、学習者が特に問題を感じていることが示唆された。

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、「日本語の接触場面で縮約形を言うのが難しい」、「縮約形より、原形のほうに慣れている」の2項目に有意な差、「縮約形の発音がとても難しい」の1項目に傾向差が見られた。どの項目においても、「使いたい」群の得点に比べて、「使いたくない」群の得点のほうが高かった。すなわち、「使いたい」群より「使いたくない」群のほうが、より問題を感じていた。

表4 縮約形における問題

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P 値
縮約形の発音がとても難しい	2.17	1.06	2.07	1.00	2.64	1.18	0.09 (*)
日本語の接触場面で縮約形を言うのが難しい	2.48	1.26	2.35	1.26	3.05	1.10	0.03 (**)
正確に縮約形を言うのが難しい	2.89	1.26	2.82	1.27	3.23	1.11	0.20
縮約形を聞き取るのが難しい	2.76	1.12	2.71	1.09	3.00	1.23	0.41
縮約形より、原形のほうに慣れている	3.04	1.27	2.88	1.25	3.76	1.11	0.01 (**)
原形と縮約形を正確に使い分けるのが難しい	2.37	0.93	2.30	0.89	2.70	1.01	0.16
原形と縮約形を正確にシフトするのが難しい	2.95	1.18	2.93	1.14	3.05	1.34	0.74
使っている縮約形を間違える不安がよくある	3.15	1.19	3.11	1.20	3.35	1.13	0.46
縮約形という概念はとても抽象的である	2.78	1.14	2.69	1.11	3.23	1.16	0.10
縮約形が使えなかったため笑われたことがある	1.37	0.77	1.30	0.66	1.70	1.07	0.16
縮約形が分からないため日本人の言っていることが分からない時がよくある	2.44	1.21	2.35	1.15	2.82	1.38	0.22
縮約形を書くのが難しい	2.29	1.04	2.20	1.00	2.70	1.12	0.11

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

「縮約形の問題」については、縮約形使用を阻害する要因として、「縮約形より原形のほうに慣れている」、「使っている縮約形を間違えると不安がよくある」などがあることが確認された。「使いたい」

群に比べて、「使いたくない」群は「日本語の接触場面で縮約形を言うのが難しい」、「縮約形より、原形のほうに慣れている」、「縮約形の発音がとても難しい」を特に問題視していた。「使いたくない」群である学習者が抱えるこれらの不安を軽減させることで使用を促進させることができると考えられる。

3.4 縮約形を通して得られるもの

縮約形を通して得られるものに関する各項目の得点を表5に示した。得点が高いほど、縮約形を通して得られるものがあると学習者が考えていることを意味した。全6項目の得点は、「縮約形を使うことによって日本人に日本語能力を高く評価してもらえる」を除きすべて中央値の3.0を上回っており、「縮約形を使うことによって自然な日本語を使用することができる」を特に有益な点だと学習者が考えていることが示唆された。

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない *t* 検定を行った。その結果、「縮約形を使うことによって自然な日本語を使用することができる」の1項目に有意な差、(縮約形を使うことによって)「個性を表すことができる」、「日本人に日本語能力を高く評価してもらえる」の2項目に傾向差が見られた。

表5 縮約形を通して得られるもの

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P 値
縮約形を使うことによって個性を表すことができる	3.24	0.93	3.32	0.92	2.88	0.89	0.09 (*)
縮約形を使うことによって日本人に日本語能力を高く評価してもらえる	2.92	0.96	3.02	0.912	2.47	1.03	0.05 (*)

縮約形を使うことによって日本人とのよい人間関係を築くことができる	3.14	0.88	3.17	0.87	3.00	0.90	0.47
縮約形を使うことによってより速くあるいはさらに日本の言語社会に溶け込むことができる	3.48	0.92	3.55	0.87	3.17	1.09	0.21
縮約形を使うことによって会話能力をアップさせることができる	3.70	0.91	3.76	0.89	3.41	0.97	0.18
縮約形を使うことによって自然な日本語を使用することができる	4.13	0.81	4.25	0.75	3.58	0.84	0.00 (**)

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

表 5 からわかるように、「縮約形を通して得られるもの」に関しては、縮約形を使用することによって、「自然な日本語を使用することができる」と思っている学習者が最も多かった。そのほかに、「会話能力をアップさせる」、「より速く或いはさらに日本の言語社会に溶け込む」、「個性を現す」、「日本人とのよい人間関係を築く」ことができるといった回答も多いことがわかった。このように、多くの学習者が縮約形の使用を通して得られるものがあると考えていた。縮約形を使うことで、自分の日本語が自然になると考えられる学習者が多かったことから、縮約形を運用できることが学習者の日本語会話能力への自信につながると考えられる。すなわち、縮約形使用を通して会話能力が育まれることを学習者が期待していることが窺われた。縮約形使用を通して、会話能力、自然な日本語表現を育むだけでなく、日本人とかわる際の言葉の知識や経験を獲得することで不安を和らげることも期待される。会話教育の一環として日本人と会話する場を提供して、不安を和らげることが可能である。

ただし、縮約形を使うことによって、「日本人に日本語能力を高く

評価してもらえると」の得点は中央値の 3.0 以下であり、「使いたい」群と「使いたくない」群の間に傾向差が見られた。「使いたくない」群の学習者は特に縮約形使用を通しては得られにくいと考えていた。しかし、嶺岸（1997）と東（2010）は、友達同士の会話などのインフォーマルな場面では縮約形の使用が高く評価され、また「んだ」、「けど」などの縮約形は原形よりも評価が高く、初級の段階からフォーマルな場面でもその使用が許されることを指摘している。この点について、もっと積極的に指導することが大切であることを示唆している。また、「使いたくない」群は、（縮約形を使うことによって）「自然な日本語を使用することができる」、「個性を表すことができる」、「日本人に日本語能力を高く評価してもらえる」は使用を通して得られにくいと考えられる傾向にあった。各項目の得点は比較的高かったため、何も得られないと考えてはいなかったものの、使用を通して得られるものの多さについて知ることができれば、縮約形使用は促進されるかもしれない。

3.5 縮約形の接触環境

縮約形の接触環境に関する各項目の得点を表 6 に示した。得点が高いほど、縮約形をよく耳にすると学習者が考えていることを意味した。全 3 項目の得点は、「まわりの日本人がよく使っている」と「マスメディアがよく使っている」は中央値の 3.0 以上であるが、「先生がよく使っている」については平均値が 3.0 を下回っており、特に聞く機会が少ないと学習者が考えていることが示唆された。

「使いたい」群と「使いたくない」群の間に差があるか検討するため、対応のない t 検定を行った。その結果、すべての項目に有意な差が見られなかった。

表 6 縮約形の接触環境

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P 値
会話や聴解の先生がよく縮約形を使っている	2.47	0.91	2.43	0.85	2.64	1.13	0.49
まわりの日本人がよく縮約形を使っている	3.83	1.00	3.87	0.92	3.64	1.28	0.51
マスメディア（アニメ、映画など）で日本人がよく縮約形を使っている	4.43	0.70	4.48	0.63	4.17	0.92	0.21

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

表 6 に示されているように、「縮約形の接触環境」については、話しことばの教育を担当する先生の発話にはあまり縮約形が使用されないことがわかった。さらに表 7 には学習者が教科書・教室以外で縮約形に触れる機会の調査結果を示す。平均値が 3.5 以上の項目としては、数値の高い順に、テレビ番組 (3.94)、漫画 (3.89)、日本語の歌 (3.58) である。情報化社会が進むなか、メディアを通じて学習者が日本語に触れることが多くなってきている結果が出ている。その中で学習者は縮約形を耳にする可能性が高いと考えられる。一方、先生 (2.92) と日本人友人 (2.82) は 11 種類の中で 7 位と 8 位を占めており、日本語で実際に人的交流をとる機会が決して多くないと言える。

表 7 教科書・教室以外で縮約形に触れる機会

	全員		使いたい群		使いたくない群		差の検定
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	P 値
1. 日本人友人	2.82	1.54	2.84	1.56	2.70	1.48	0.73
2. 動漫画	3.89	1.41	4.01	1.34	3.35	1.56	0.13

3. 映画	3.27	1.25	3.37	1.25	2.82	1.14	0.09 (*)
4. テレビ番組	3.93	1.16	4.08	1.11	3.23	1.16	0.01 (**)
5. 教師	2.91	1.23	2.92	1.21	2.88	1.32	0.91
6. SNS ²	3.40	1.25	3.46	1.25	3.11	1.18	0.30
7. 小説	2.62	1.32	2.70	1.32	2.23	1.26	0.19
8. ホームページ	3.45	1.21	3.50	1.17	3.23	1.35	0.47
9. ラジオ放送	1.82	1.21	1.87	1.26	1.58	0.91	0.30
10. 日本語の歌	3.54	1.30	3.56	1.30	3.47	1.28	0.79
11. 個人の電子メール	1.88	1.02	1.85	1.00	2.00	1.08	0.63

注 1) 差の検定結果は、使いたい群と使いたくない群の差の検定結果である。

注 2) **p<0.05、*p<0.1

つまり、マルチメディアを十分に活用すれば、JFLの学習者でも縮約形を習得することは可能だと考えられる。とりわけ「テレビ番組」の1項目に有意な差、「映画」の1項目に傾向差が見られたことから、「使いたくない」群に比べて、「使いたい」群の学習者がよくテレビ番組と映画を通じて日本語に触れている。それにもかかわらず、台湾におけるJFL環境では、日本語を実際に使用する機会が制限されるため、その使用機会のなさが使用を阻害するのではないかとと思われる。このことから、学習者の使用を促すためには、日本人との交流の場を提供する支援が特に重要だと言える。そのため、留学する機会を増やしたり³、台湾留学・訪問している日本人など母語話者との交流活動を積極的に導入することが有効であると考えられる。日本語によるインターネットコミュニティへの参加を促す教室活動を取り入れたり、大学に設置してある「日本語コーナー」のような場の利用を推進したり、国際交流や教育実習に来た日本人大学生・高校生、または日本人在住者のネットワークを通して交流の

3. ソーシャルネットワークサービスのことである。

4. 今回の調査(表1)では、留学あるいは滞日経験なしの学生は、95名のうち66名であり、69%と高い比率を占めている。

輪を広げることなどが挙げられる。

4. まとめ

本研究では、今まで十分に知られていない台湾の日本語学習者における縮約形の使用意識について調べた。調査を通じて、使用意思のあった学習者は使用意思のなかった学習者の約 4.6 倍存在し、台湾の中上級学習者には縮約形に関する知識をある程度持っていることがわかった。しかし、「縮約形を使うと失礼な印象を与える」、「使っている縮約形を間違える不安がよくある」など、縮約形使用を阻害する要因が存在し、それらによって使用を諦めざるを得ない状況があることは否定できなく、それらに関する指導も十分なされていないことが明らかとなった。特に「使いたくない」群が縮約形への対処に関して積極的であるとも言い難い結果が得られた。使いたい学習者に比べて、使いたくない学習者は、縮約形使用のマイナスなイメージを持っていることや、「接触場面で言うのが難しい」、「原形のほうに慣れている」、「発音がとても難しい」などの縮約形使用における問題をより問題視していること、その他にも（縮約形を使うことによって）「自然な日本語を使用することができる」、「個性を表すことができる」、「日本人に日本語能力を高く評価してもらえる」とは思えないと考えていることが明らかとなった。学習者の縮約形使用を促進させるためには、縮約形の定義を定着させたり、縮約形を使用する機会や場を増やしたり、使用場面や範囲などの正しい知識、そして使用によって得られるものの多さを発信していくことが重要となることが示唆された。特に使いたくない学生の不安を軽減させるような情報が重要である。縮約形の使用を迷っているときには、学習者自身が抱える不安をしっかりと聞き、寄り添うことが重要となる。必要に応じて、解決策を一緒に模索することも大切になる。

最後に、今回は 1 大学の調査結果であるが、この結果を基に今後調査人数と教育機関数を増やし、縮約形の使用意識について台湾の日本語学習者全般の調査結果を検証したい。さらに、今後はインタ

ビュー調査や学習記録などの分析を行い、大学における縮約形の使用意識に関して量的研究では説明し切れなかった部分のさらなる解明に道を開いていきたい。

参考文献

- 浅田浩文 (2004) 「フォーマルからインフォーマルへ—中国人留学生の日本語発話資料に見られる言語接触—」『福岡女学院大学短期大学部紀要 一般教育・英語英文学』40、P. 1-17
- 鮎沢孝子 (1988) 「話しことば」の特徴--聴解指導のために」『日本語教育』64、P. 1-12
- 五十島優 (2001) 「話しことばにおける音変化の聞き取り教材に関する試用報告--その実用化に向けて」『筑波大学留学生センター-日本語教育論集』16、P. 147-161
- 五十島優ほか (2001) 「学習者にとって聞き取りが困難な話し言葉の音変化とは : 撥音化・拗音化の場合」『日本語教育方法研究会誌』8(2)、P. 26-27
- 平形裕紀子ほか (2002) 「音変化の効果的な認識練習開発に向けて」『日本語教育方法研究会誌』9(1)、P. 32-33
- 上原聡・福島悦子 (2004) 「やっぱり丁寧に話しちゃいますんで一丁寧体の会話における縮約形とくだけた表現の使用—」南雅彦編『言語学と日本語教育IV』東京くろしお出版、P. 42-43
- 大坪一夫 (1982) 「縮約形」日本語教育学会編『日本語教育事典』東京大修館書店、P. 52-53
- 川喜田二郎 (1967) 『発想法』東京中央公論新社
- 川瀬生郎 (1992) 「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』2、P. 1-24
- 小針奈津美 (2013). 『日本語学習者の縮約形使用意識に影響する諸要因』早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文概要書
<http://www.gsjal.jp/toda/dat/kob.pdf>
- 近藤雅恵 (2005) 「日本語の口語的変形」『人間文化論叢』8、P. 289-296

- 齋藤純男（1991）「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』6、P. 89-97
- 高橋朋美（2012）「日本語教育における縮約形の指導に関する一考察—使用場面に着目して—」『宮城学院女子大学大学院人文学会誌』13、P. 1-15
- 竹田有希（2011）『日本語縮約形への一考察—教科書分析と教師意識を中心に—』国立高雄第一科技大学修士論文
- 東会娟（2006）「会話コーパスに見る中国人日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』7、P. 51-66
- 東会娟（2008）「中国人上級日本語学習者の縮約形の使用状況」『言葉と文化』9、P. 343-356
- 東会娟（2009）「中国の大学日本語教育における縮約形の指導について」『言葉と文化』10、P. 151-164
- 東会娟（2010）「關於日語縮約形表達的研究—從日語為母語者的評估和學習者的習得現狀分析」『日語學習與研究』148、P. 24-30
- 土岐哲（1975）「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28、P. 55-66
- 土岐哲・村田水恵（1989）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ 12 発音・聴解』東京荒竹出版
- 土岐哲（2010）「第4章 日本語音声に見られる諸現象の実態」『日本語教育からの音声研究』東京ひつじ書房
- 中村フサ子、小泉美礼、樽田ミエ子（2003）「テレビドラマの会話に見られる縮約形の調査・分析」『東海大学紀要 留学生教育センター』23、P. 85-100
- 福島悦子、上原聡（2004）「丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察—日本語の母語話者と学習者の会話を比較して—」『国際文化研究科論集』12、P. 121-130
- 福島悦子、上原聡（2005）「丁寧体の会話における「と」と「って」の使用に関する一考察」『東北大学国際交流センター紀要』（1）、P. 3-10
- ボイクマン総子（2010）「丁寧体の会話における日本語母語話者の音

- 声転訛」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』25、P.17-35
- 堀口純子(1989)「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」
『文藝言語研究 言語篇』15、P.99-121
- 丸山和香子(1989)「女性の話しことば—テレビのインタビュー番組から—④縮約形について」『ことば』10号、現代日本語研究会
- 嶺岸玲子(1997)「外国人が用いる縮約形に関する日本人の評価」『言語科学論集』1、P.111-122
- 峰岸玲子(1999)「日本語学習者への縮約形指導のめやす—日本人による評価と使用率をふまえて—」『日本語教育』102号、P.30-39
- 羅濟立(2014)「台湾人日本語学習者における音声転訛形の使用状況—丁寧体の会話を中心に—」『台湾日語教育學報』23号、P.196-219

付録（アンケートの内容）

日語使用情形調查—縮約形

日語的口語中存在著不少所謂的「縮約形」，例如：「けれども→けど」、「てしまう→ちゃう」、「なければ→なきゃ」、「では→じゃ」、「やはり→やっぱり」等等。本問卷想調查您對使用縮約形的想法。問卷結果僅供整體統計分析使用，不做任何有關個人資料之評價，敬請放心作答。

一、基本資料

性別	<input type="checkbox"/> 男 <input type="checkbox"/> 女
日語能力認證	<input type="checkbox"/> N1（1級） <input type="checkbox"/> N2（2級） <input type="checkbox"/> N3 <input type="checkbox"/> N4（3級） <input type="checkbox"/> N5（4級） <input type="checkbox"/> 沒有
日語會話能力	<input type="checkbox"/> 非常流利 <input type="checkbox"/> 還算流利 <input type="checkbox"/> 普通 <input type="checkbox"/> 會說一點 <input type="checkbox"/> 幾乎完全不會
期待自己的哪些口頭會話能力可以再提昇?(可複選)	<input type="checkbox"/> 發音 <input type="checkbox"/> 詞彙 <input type="checkbox"/> 文法 <input type="checkbox"/> 流暢度 <input type="checkbox"/> 自然度 <input type="checkbox"/> 溝通能力 <input type="checkbox"/> 社交能力 <input type="checkbox"/> 話題之多樣性 <input type="checkbox"/> 其它_____
留學日本或滯日期間	<input type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 1至3個月 <input type="checkbox"/> 4至6個月 <input type="checkbox"/> 7至12個月 <input type="checkbox"/> 1年至2年 <input type="checkbox"/> 2年以上

二、除了在教室或教科書，您透過哪些管道知道縮約形呢？

1. 日籍友人 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
2. 動漫 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
3. 電影 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
4. 電視節目 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
5. 師長 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
6. 社群網站 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
7. 小說 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
8. 網頁 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有

9. 收音機 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
10. 日文歌曲 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
11. 私人電子郵件 經常 偶爾 普通 很少 幾乎沒有
12. 其他 _____

三、若擇其一，我傾向於想使用縮約形嗎？想 不想

四、對於以下各項的說明，您的同意度為何？

1. 我可以區別什麼是口語(話し言葉)，什麼是書面語(書き言葉)。
非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

2. 我知道縮約形使用於日語的口語會話中，而非書面語。非常同意
還算同意 普通 不同意 非常不同意

3. 我知道縮約形除使用於非正式場合之外，部分縮約形也能使用於敬體的口語會話中。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

4. 我知道縮約形會因文法的差異影響使用率。例如「では→じゃ」的縮約現象，在名詞後面的複合助詞(例:日本じゃよくあることだ)、或是當接續詞(例:じゃ、また)、或是後面是否定表現(例:学生じゃない)時，其使用的頻率是不同的。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

5. 我知道縮約形會因文法的差異影響禮貌度。例如「では→じゃ」的縮約現象，在名詞後面的複合助詞(例:日本じゃよくあることだ)、或是當接續詞(例:じゃ、また)、或是後面是否定表現(例:学生じゃない)時，其禮貌度是不同的。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

6. 我知道日本人講話很快時就有可能出現縮約形。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
7. 我覺得使用縮約形會對人不禮貌。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
8. 我覺得使用縮約形會給人說話粗魯的印象。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
9. 我覺得縮約形是年輕人的用法，不太穩重。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
10. 我覺得縮約形的發音很難。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
11. 我覺得要實際用日文說出縮約形很難。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
12. 我覺得要正確說出縮約形很難。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
13. 我覺得要聽得懂縮約形很難。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
14. 我覺得比起縮約形，使用原形比較習慣。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
15. 我覺得要正確區別原形與縮約形很難。非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

16. 我覺得要正確轉換原形與縮約形很難。 非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
17. 我覺得沒有使用縮約形的必要。 非常同意 還算同意 普通
不同意 非常不同意
18. 我覺得常常會擔心自己的縮約形用錯。 非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
19. 我覺得會話或聽力老師常常使用縮約形。 非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
20. 我覺得身邊的日本人常常使用縮約形。 非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
21. 我覺得多媒體(動漫、電影等)中的日本人常常使用縮約形。 非常
同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
22. 我覺得使用縮約形能展現自己的個性風格。 非常同意 還算同
意 普通 不同意 非常不同意
23. 我覺得使用縮約形時能讓日本人對我的日語能力評價較高。 非常
同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
24. 我覺得縮約形的使用有助於與日本人建立良好的人際關係。 非常
同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
25. 我覺得縮約形的使用能更快或進一步融入日本的語言社會。 非常
同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意

26. 我覺得縮約形的使用能提昇會話能力。非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
27. 我覺得縮約形的概念很抽象。非常同意 還算同意 普通
不同意 非常不同意
28. 我曾經因為不會使用縮約形而被取笑。非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
29. 我覺得縮約形只要習慣就好，不需特別加以學習。非常同意
還算同意 普通 不同意 非常不同意
30. 我覺得只要學習正式的語法形式(原形)即可，不需學習縮約形。
非常同意 還算同意 普通 不同意 非常不同意
31. 我常因為不懂縮約形而不知道日文在說什麼。非常同意 還算
同意 普通 不同意 非常不同意
32. 我希望教科書或老師多教一些縮約形。非常同意 還算同意
普通 不同意 非常不同意
33. 我覺得縮約形會讓自己的日文變得更自然。非常同意 還算同
意 普通 不同意 非常不同意
34. 我覺得縮約形的學習要越早越好。非常同意 還算同意 普
通 不同意 非常不同意
35. 我覺得縮約形的書寫很難。非常同意 還算同意 普通
不同意 非常不同意